

第18弾
Vol.3

知っておきたい がん医療

最前線

主催/静岡新聞社・静岡放送 共催/県立静岡がんセンター、三島市、長泉町、裾野市、函南町、清水町、三島市民文化会館 特別協賛/スルガ銀行

静岡がんセンター公開講座 2021「知っておきたいがん医療最前線」(静岡新聞社・静岡放送主催、県立静岡がんセンター、三島市、長泉町、裾野市、函南町、清水町、三島市民文化会館共催、スルガ銀行特別協賛)の第3回配信(事前登録制)がこのほど行われました。第3回は県立静岡がんセンター化学療法センター部長の村上晴泰氏が「肺がん薬物療法の最新治療」、同センター研究所・看護技術開発研究部長の北村有子氏が「医療情報を得て活用するために～患者向けがん薬物療法説明書の紹介」と題し、それぞれの講演をネット配信しました。その概要をまとめました。
(企画・制作/静岡新聞社地域ビジネス推進局)



医療情報を得て活用するために ～患者向けがん薬物療法説明書の紹介～

自分で医療情報を集め考えるときは、漠然と調べずに「何を

何のために調べるか確認

静岡がんセンターは理念の一つに「患者家族支援」を掲げ、患者・家族支援研究部と看護技術開発研究部を設置しています。この二つの部署は患者さんご家族の暮らしや療養に関わる情報支援を行っています。当研究部ではがん薬物療法を受ける患者さん向けに説明書を作成しています。

医療情報を集めて考えると、患者さんの情報を一番多く持つのは担当医です。まずは担当医からの説明内容を一番に理解してください。説明が分からない場合は、積極的な質問や確

「処方別がん薬物療法説明書」とは

次に、当研究部が2017年から取り組む「処方別がん薬物療法説明書」を紹介します。これは、がん薬物療法(抗がん剤治療)を受ける患者さんやご家族向けに、使用する薬の組み合わせや病気の種類別に、医師、薬剤師、看護師が説明する内容を一冊にまとめたものです。消化器や呼吸器など100種類以上の説明書があります。説明書は当院のホームページからPDFでの閲覧、ダウンロードも可能です。

患者さんからは「食欲不振の内容が具体的に参考になった」「どんな症状が出たら病院に連絡するか分かりやすい」「情報

「振り返る」

説明書の活用として、まず「知る」ことに重きを置いています。治療の目的、治療期間、点滴スケジュール、現れやすい副作用の一覧などを載せています。第2段階は「実行する」です。治療前から予防策としてできる方法を紹介します。各副作用のページは「治療前」「治療開始後」「症状が現れたら」など見出しをつけ、時期に合った行動が、イラストなどでイメージできるように心掛けていきます。

味覚変化が起こる場合があります。ご飯が炊けるにおい、魚の生臭さなどに違和感を持つことがあります。また、味の濃さや甘みに敏感になったり、肉類の味を苦味や金属のような味と感

「振り返る」

説明書の活用として、まず「知る」ことに重きを置いています。治療の目的、治療期間、点滴スケジュール、現れやすい副作用の一覧などを載せています。第2段階は「実行する」です。治療前から予防策としてできる方法を紹介します。各副作用のページは「治療前」「治療開始後」「症状が現れたら」など見出しをつけ、時期に合った行動が、イラストなどでイメージできるように心掛けていきます。

当研究部では患者さんやご家族の視点を大切に、よりよい情報支援に努めていきたいと考えています。

【事前登録申し込み方法】

お問い合わせ: TEL 055(962)6520
①郵便番号・住所 ②氏名 ③生年月日(西暦) ④年齢 ⑤性別 ⑥職業(学校名) ⑦電話番号 ⑧FAX番号 ⑨メールアドレス ⑩視聴方法(パソコン、スマホなど)を明記し、下記の静岡新聞社・静岡放送 東部総局にお申し込みください。1回だけの受講も可。
<はがき> 〒410-8560 (住所不要) 静岡新聞社・静岡放送 東部総局「静岡がんセンター公開講座」係
<FAX> 055-962-6752 <Eメール> toubugyoumu@shizuokaonline.com ※FAXとEメールは件名に「静岡がんセンター公開講座」と記してください。
次回の配信は12月11日(土)13時～予定です。 ※受講料無料

肺がん薬物療法の最新治療

がんは正常な細胞の遺伝子が傷つく遺伝子異常で発生します。遺伝子異常が起こる原因には加齢、喫煙、飲酒、紫外線、一部のウイルス感染などが挙げられます。国内の状況を鑑みると高齢化が進んでおり、がん罹患(りかん)者数の増加が予想されます。がんの治療は手術や放射線療法のほか、薬物療法が行われます。当院にはがん患者さんの薬物療法を行う外来化学療法センターがあり、昨年度は2万9247件の治療が行われています。

薬によって異なる副作用

肺がんは組織型(非小細胞肺がん・小細胞肺がん)と病期(がんの進行程度)によって治療方針が異なりますが、多くの患者さんが抗がん剤による薬物療法の対象になります。

抗がん剤という「吐き気、脱毛」を連想する方もいるでしょうが、薬によって注意が必要な副作用は異なります。以前は、シスプラチンもしくはカルボプラチンという白金製剤と他の薬剤の二剤併用療法が標準的に行われていました。カルボプラチンとパクリタキセルの併用療法はシスプラチン併用療法と比較して腎臓に対する負担が軽く、吐き気も軽いですが、脱毛や末梢神経障害(手足のしびれ)は強いといった特徴があります。

現在、肺がん薬物療法の主役はシスプラチンなどの細胞障害性抗がん剤から分子標的薬にシフトしています。分子標的薬は、がんの増殖や転移に関与する分子を治療標的とした抗がん剤であり、肺がんではEGFRという分子を標的とした内服薬のキナーゼ阻害薬が2002年から使用可能になっていました。この薬剤は一部の患者さんには非常に高い効果が得られますが、患者さんによっては従来の細胞障害性抗がん剤よりも低い効果しか得られないことが問題でした。その後の研究により、肺がん細胞の遺伝子解析を行うことで、キナーゼ阻害薬の治療効果を予測できることが明らかになってきました。

現在、EGFR以外の分子を標的とした薬剤も複数使用可能になっており、肺がん細胞の遺伝子を事前に確認して検査結果に見合ったキナーゼ阻害薬を選択する治療戦略が積極的に行われています。このような取り組みによって高い治療効果が期待できるようになってきました。残念ながらキナーゼ阻害薬

の対象とならない肺がん患者さんも多く存在します。現在、遺伝子情報に基づいたがんゲノム医療をさらに進める試みが、肺がんを含めたがん治療全体で行われており、静岡がんセンターも「がんゲノム医療中核拠点病院」に指定されています。



県立静岡がんセンター化学療法センター部長

むらかみ はるやす
村上 晴泰氏

1996年広島大学医学部卒。99年国立がんセンター中央病院内科レジデント、2006年静岡がんセンター呼吸器内科副院長、10年同院長、15年通院治療センター長兼任、17年化学療法センター部長兼任。日本内科学会専門医、日本呼吸器学会専門医・指導医、がん治療認定医。専門は肺がん薬物療法と新規抗がん剤開発。

「がん免疫療法」

続いてがん免疫療法を紹介します。2014年に免疫の不活性化に関与する分子を標的とした免疫チェックポイント阻害薬が、現在肺がんを含む多くのがんに対して使用されています。当院の外来化学療法センターにおいても、昨年度は4511件の免疫チェックポイント阻害薬による治療が行われています。肺がんでは、前述のキナーゼ阻害薬が適応とならない患者さんでは、免疫チェックポイント阻害薬による治療が検討されます。そのため、外来化学療法センターにおいても免疫チェックポイント阻害薬による治療を受ける肺がん患者さんは年々増加しています。免疫チェックポイント阻害薬は従来の細胞障害性抗がん剤と比較し

て副作用の頻度は少ないことが知られていますが、過剰な免疫反応によって重篤な副作用も生じるため注意が必要です。また、免疫チェックポイント阻害薬などの新薬には高額の医療費の問題もあります。治療を継続するためには医療従事者だけでなく、治療を受ける患者さんにも治療を理解していただくことが大切です。当院では患者さんやご家族の皆さまにご理解いただけるよう、副作用など治療の要点をまとめた処方別がん薬物療法説明書を作成、配布しております。